現職教員特別参加制度の意義について

芝田政之
（文部科学省大臣官房国際課長）

皆さん、おはようございます。文部科学省国際課長の芝田と申します。宜しくお願い致します。文部科学省を代表して一言ご挨拶を申し上げたいと思います。

これまでは、帰国された先生の報告会と次年度派遣予定の先生の特別研修を別々に実施しておりましたが、今年度からこの２つを合同で行うことに致しました。これにより、多くの新規派遣予定の先生に先輩の経験談に接する機会が提供され、先生同士のネットワーク作りの一助になればと期待しております。また、本会は、調査研究の成果を活用し、学問的にこの分野をサポートしていただいている大学の先生の発表を聞くなど、学問を通して得られた知見の実践的なプロジェクトへの活用・適用について学ぶ機会でもあります。

平成 19 年度に青年海外協力隊員として派遣された帰国教員の皆様、既に帰国後 9 カ月が経とうとしておりますが、2 年間の活動大変お疲れ様でした。日本とは教育環境はもちろん、住環境もまったく異なる途上国で、色々な困難があったとお察しします。一方で日本の教育を外から見直すよい機会であったかとも思います。ある意味、学校は閉じられた社会ですので、教育委員会でも教員を民間企業に派遣するなど、外に出る機会を増やしているとは思いますが、皆様はその中でも異文化体験という貴重な経験をしてこられたことになります。最近では特に若者の内向き志向が強いと指摘されておりますが、そうした中でチャレンジ精神旺盛にこのプログラムに参加していただいたことに本当に敬意を表したいと思います。色々な意味で自分の世界を広げて帰って来られたものと思います。

それから来年度派遣予定の皆様、３学期開始早々のこの時期に本研修に参加いただき本当にありがとうございました。文部科学省では JICA、教育委員会、外務省等と協力して、現職の先生がこの活動に参加しやすいように、平成 13 年度に現職教員特別参加制度を創設致しました。以来 8 年間で約 600 名の現職の先生が世界に派遣されています。来年度は青年海外協力隊 78 名、日系社会青年ボランティア 7 名の 85 名を派遣する予定です。現職の先生は児童・生徒に密着した実践的な教育経験・能力をお持ちですので、派遣された国ではそれを活かして国際貢献に寄与していただくことを期待しております。また一方で、こうした国々で経験を積まれることで、帰国後の教育活動もより充実するものと信じております。先ほども申しましたように、若者がどんどん内向き志向になる中で、特に私が期待するのは、若者がより早い時期から異文化へ接触することです。その意味では帰国後の学校等での活動がこのプログラムのより重要な部分になっているのかもしれません。是非、帰国後の活動を充実させていただきたいと思います。

このような背景のもと、文部科学省では、青年海外協力隊事務局の協力を得まして、昨

年９月から開発途上国でのボランティア経験を日本の教育に生かす研究を続けておられる先生と、これを有効に活用しようとされている教育委員会などの取り組みについて調査を進めております。今日はその調査を担当していただいた先生から中間報告をいただくことになっています。

本帰国報告会を特別研修の一環として受講されている来年度派遣予定の皆様には、本研修後、学校での３学期の指導、４月からの派遣前研修を無事終えられ、それぞれの任国の子供たちのもとへ旅立っていただきたいと思います。

帰国教員の皆さまにおかれましては、これからが任国での経験を生かしていただく大切な時期でございますので、本日の報告会で得られる情報、また人脈を活かして、今後の活動を充実させていただければと思います。

最後になりましたが、本シンポジウムの実施にあたり、多大なご支援をいただいております JICA 青年海外協力隊事務局、および開催にご尽力いただいております筑波大学教育開発国際協力研究センターの関係者の皆さまに深く感謝申し上げますとともに、皆様の益々のご健勝とご活躍を祈念致しまして冒頭のご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します。